

第二章 慈悲と善

二章一節 智慧と慈悲

このような命の根源的な平等性や尊厳性があるからこそ、そこから必然的に「慈悲」の発露がある。自他の本質においての平等性にもとづいて、無条件の愛の自覚に至る。慈悲は人間の本性によって基礎付けられるものであり、そこから必然的に生じるものである。それは外から強制される規制や道徳ではなく、特定のプロパガンダやイデオロギーでもない。人間本性から発する慈悲は、時代性や地域性、民族性にも左右されることは無く、普遍性を有する。

次に記す最古の仏教経典「スッタニパータ」からの引用文は、人間存在に限定されず、命あるものすべてに、生きとし生けるものすべてに、差別無く平等に注がれるべき慈悲の重要性を説くものである。

あたかも、母が己が独り子を命を賭けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の（慈しみの）こころを起すべし。

また全世界に対して無量の慈しみの意を起すべし。

上に、下に、また横に、障害なく怨みなく敵意なき（慈しみを行うべし。）

立ちつつも、歩みつつも、坐しつつも、臥しつつも、眠らないでいる限りは、この（慈しみの）心づかいをしっかりとたもて。

この世では、この状態を崇高な境地と呼ぶ⁽¹⁾。

いかなる生物生類であっても、怯えているものでも強剛なものでも、悉く、長いものでも、大きなものでも、中くらいのものでも、短いものでも、微細なものでも、粗大なものでも、

目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ⁽²⁾。

現代の唯物論的な思想においては、「自己と世界の本質を知ること」と「無条件の愛」の二つは、完全に別次元の異なる問題となっている。現代の知性は論理的思考のはたらしきによって、自己を思考化して、非自己（世界）の論理的な秩序性を把握し、そこに論理的秩序性を満たす実存（物質）を措定する。この論理的な実存の世界（物質の世界）

の内には、合理性や秩序性は存在するが、慈悲も愛も人間が従うべき道徳も無い。

これに対して、東洋（仏教）の叡智は、「自己と世界の本質を知ること（智慧）」と「無条件の愛（慈悲）」を一つの同じ次元の問題として扱う。無分別智において空性を如実に理解することは、自他の完全な平等性と生命の無限の尊厳性を知ることにつながる。この自他平等の原理は、必然的に慈悲あるいは無条件の愛を発露する。

仏道は人間の本性に根差した「智慧」と「慈悲」を説き、実践によってそれを学ぶ。そこにおいて、人間存在の「真」と「善」は一つに結び付くことになる。

二章二節 善

仏教が指摘するように、普段の生活において私たちは自己の本性に無明であり、その行動は欲望に塗れ、苦の渦中にある。仏教はそのような私たちに、自己の本性を自覚することを促し、自己のシステムを欲望の原理の上に築くのではなく、自己本来の根本的な慈悲の原理の上に築くべきであると諭す。自我を形成する五蘊のプロセスは、この人間本性に根づいた慈悲の原理の上に築かれてこそ、真の意味と価値をもつことになる。

これまで何度も述べているように、五蘊の要素は自我を仮構する要素であるが、それは認知行動のプロセスそのものでもある。この五蘊の観点から、私たち人間の行動の原理を考察してみれば、意識を伴う場合には次に示すような少なくとも三種の行動原理が存在していると考えられる（意識を伴わない、反射的あるいは無意識的行動は、次章で考察する）。

〈第一〉は、快・不快の感覚にもとづく本能的行動（受・行）である。私たちが何かを意識したときには、原初的な快・不快の感覚（受）が生じ、何かしらの本能的な行為（あるいは反応）に結び付く。何かを見たり、聞いたり、感じたりしたときには、いつも快・不快の感覚が生じ、私たちはそれに反応して、執着あるいは回避することになる。

〈第二〉は、理性、判断にもとづく理知的行動（受・想・行）である。何かしらの感覚やイメージに対して高次の意味処理が施され、判断区別、概念化されて行動へと結び付く。その思考活動を含む認知プロセスには原初的情動が分化発展した高次の感情が伴っている。

意識場において形成された「今現在の意識シーン」では、五蘊の構成要素は瞬間毎に、競合、調和、統合を繰り返し、第一あるいは第二の行動に結び付く。そこでは、今この瞬間だけではなく、過去の記憶や未来の概念などが結合し、過去から未来への時間軸に沿った統一的な目的のある行動が可能となっている。

このような第一と第二の行動原理に従った五蘊のプロセスは、個人それぞれに特有でユニークなものとして形成され、個々の才能、境遇、人生経験、社会や文化背景などに応じて分化発展する。今現在の意識シーンでは、個々の目的に応じたかたちでの、それぞれ独自の意味と価値の体系が創造されており、そこから個性豊かな行動が生まれている。

このような個性豊かな第一と第二の行動原理の根底には、人間の根本的平等性／慈悲にもとづいた〈第三〉の行動原理が存在する。それは人間の本性にもとづく行動の基礎原理であり、無条件の愛、慈悲の発露である。それは自己と他者の命そのものを本質的には平等とみて、最大限に尊重する意志である。私たちの真の自由な行動は、単なる欲望や情欲の充足ではなく、この根底の絶対的平等愛の自覚にもとづいたものとならねばならない。日常生活の中での一つ一つの意識的行為は、この根底にある命そのものの平等性や尊厳性が自覚されたときにこそ、最も普遍的な意味と価値を伴う行動（善）となる。個性はその個性を尽くすことに意味と価値があるが、命そのものの最深なる要求に従うときにこそ、最も大いなる意味と価値を得るに至る。

私たち人間に授けられた最も高貴なる道徳というものは、私たち人間の行為を外から規制するものではなく、自己自身の内なる本性から発露し、最善の行為へと促すものである。私たち人間社会には行動の規範となる規則や道徳は確かに必要ではあるが、真の善なる行為は「外」からの要請に従うものではなく、「内」なる命そのものの普遍的な要求に従うものである。もし神の愛というものがあるのならば、それは人間の本性から発露し、人間の行動を通じて発露するものであろう。

1 「ブツダのことば」中村元（訳）岩波書店（1984）三八頁

2 同上 三七頁